



[氏名] 木島 朋子  
[出身都道府県] 新潟県  
[卒業期] 31期（平成20年度卒）



昔から、マイノリティに身を置くことを大切にしている。

少数で不自由であることは、大きく自由に飛躍できるチャンスを持っているように感じる。

2年の初期研修を終え、地域基幹病院で内科診療に携わったのち、約50床の小さな地域病院に向った。臓器別に相談できる「専門の先生」は姿を消し、同じ自治医大を卒業しあらゆる疾患に忙しそうに向き合う先輩の姿がそこにあった。本当に、主治医は私だった。

日々わからないことに向き合う連続。肺炎を治療すればいいだけではなかった。その患者は心臓にも腎臓にも傷みを抱え、時に皮膚や骨の問題も訴えた。家族や住まいの問題もあった。経済的な理由で、治療の中止を求める患者もいた。健康第一なんて常識だったが、全ての人にとって必ずしも健康が第一ではないということを感じ知らされた。

常に迷い、落ち込んでいた。1日落ち込んだら忘れなさい、と励ましてくれる優しい仲間がたくさんいた。でもそれは私には容易でなかった。胸を張って「これはいい治療が出来た」と満足したことがどれだけあったらだろうか。



医師が家庭を顧みず、己の健康に注意を払わずに働く時代が終わろうとしている。いま、初期研修を頑張っている研修医や学生の皆さんは、私たちと違い、仕事と暮らしのことを真に総合的に考えられるようになった世代だと感じている。日々の暮らしの中での医療の在り方や、治療を受ける、さらには治療という行為そのものを、まるで当たり前の価値観と思わず、大切に考えていってほしい。そして自分の生活も。

地域診療に向かうことを、何の心配もないから恐れるな、頑張れ、とは言わないし、言えない。

不十分で限られた資源の中で、豊かな感情や感覚をもって診療にあたって欲しい。私もそうであったが、その感情は時に、ネガティブで、陰険で、子供っぽくて、情けなくても全く問題ないと思う。誰もが抱くことを恐れるそういった感情や経験がきっと、柔軟で優しく、患者に寄り添える医師を作ってくれるのだと信じている。今抱いている不安をそのまま大切に抱えながら、自信など持たずに、何の負い目も感じず、がむしゃらに1日1日を大切に、時におさなりに過ごして欲しい。そして、新しいものを生みだしてほしい。

不安を抱きながら医師として過ごす日々は、後で振り返った時には本当にあたたかく、何があっても皆さんの支えとなってくれると思う。共に頑張りましょう。